

当院の訪問診療が、NHK BS1で放送されます。

放送決定

在宅死

～死に際の医療 200日の記録～

名誉院長 小堀先生による、ある患者さんの訪問診療の様子

BS1
放送

6月10日(日)午後10:00



～日本の医療は新座から～

「地域に根ざした病院として、救急に対応し、認知症や精神疾患のある患者もすべて引き受ける堀ノ内病院は、在宅医療にも力を入れている。地域には、独居や貧困に苦しむ高齢者も少なくない。経済的事情から入院できない人もおり、人生の最期をどこでどう迎えるかは、極めて切実な問題である。堀ノ内病院が向き合うのは、未来の日本の姿だ。」

私が当院に赴任して以来、しばしば口にしてきた表題がこのような形で世に知られることは小島理事長にとって大きな喜びである。何故「私にとって」ではなく「小島理事長にとって」なのか。医療と介護を含めた総合施設の創設は小島理事長の30年来の夢であった。実は私が国立国際医療研究センターを定年退職後、堀ノ内病院に赴任したのは手術も含めて、外科の臨床の場に戻りたかったためであり、介護に全く興味はなく、2005年2月、退職する土生祐司医師(小児科)に依頼されて、彼が個人的に担当していた2名の寝たきり患者を往診するまで、在宅医療の存在すら知らなかった。その後13年余り従事した在宅医療は私にとって“心に響く医療”(2016/01/08NHKラジオ深夜便 明日への言葉)であったし、自らの医師人生の完結に必須であったことは確かであるが、私が命懸けで実現しようとした医療ではない。「私にとって」ではなく「小島理事長にとって」と表現した理由である。

在宅医療という未知の世界に足を踏み入れて半年も経たないうちに、往診患者数が20名を超えた。病院近くの介護関係者からの依頼が多かったが、長年自宅で寝たきりの高齢者を抱えて心細い日々を送ってきたご家族が、ロコミで直接病院に往診依頼に来られることも少なくなかった。その中には病院から10数キロ離れた患家もあったが、事情を知れば知るほど断るわけにはいかなかった。患者数は4年後に40名を超え、9年目に100名を超えて現在150名に迫る勢いである。

社会医療法人社団 堀ノ内病院

〒352-0023 埼玉県新座市堀ノ内2-9-31
048-481-5168 (代表)